方向

第一五二号　一九九三年一月二五日　京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内　方向社

カーシャパへの授記 —法華経巡礼 八〇— 1993 01 04

原田憲雄

06-01. さて、世尊は、これらの偈を説いたのち、比丘衆の一切に告げられた——

atha khalu bhagavān imā gāthā bhāṣitvā sarvāvantaṃ bhikṣu-saṃgham āmantrayate sma /

06-02. 比丘たちよ、わたしは、あなたがたに告げて、知らせよう。わたしの弟子なるカーシャパ比丘は、未来に、三百万億の仏たちのもとで、恭敬し、師事し、尊敬し、供養し、讃嘆し、崇拝し、これら仏・世尊の正しい法を受持するだろう。かれは最後の化身で、「光徳」という国土、「大荘厳（だいしょうごん）」という劫（カルパ）に、「光明」と名づける如来・尊敬されるべき・正しく覚ったひと、としてこの世に現われ、知と行を完成し、スガタであり、世間を知り、無上のひとであり、訓練されるべき人々の調御者であり、天神と人間との教師であり、仏であり、世尊であるだろう。その寿命は十二中劫であろう。正法は二十中劫存続し、正法に似た教えも二十中劫存続するだろう。その仏国土は清浄で、明るく、石や小石や砂は除かれ、割れ目も穴も除かれ、尿や糞の溜りも除かれ、平らで、魅力的で、端正で、見晴らしがよく、瑠璃の地は宝樹で飾り、八条の金糸でつながれ、花がちりばめられているだろう。そこには幾百千の菩薩が現われ、またそこには無量幾千万億の声聞たちもいるだろう。またそこでは魔王のパーピーヤスも魔群

る付け入ることはできなかろう。あらたに菩薩や聲聞が存在するようになってゆくこの国土では、世尊・光明如来の教誡によって正法を受けられたあの輝達するものとなるだろう。

ārocayāmi vo bhikṣavaḥ prativedayāmi/ ayaṃ mama śrāvakaḥ kāśyapo bhikṣus triṃśato buddha-koṭī-sahasrānām antike sat-kāraṃ karisyati guru-kāraṃ mānanāṃ pūjanām arcanām apacāyanāṃ kariṣyati teṣāṃ ca buddhānāṃ bhagavatāṃ saddharmaṃ dhārayisyati / sa paścime samucchraya avabhāsaprāptāyāṃ loka-dhātau mahāvyūhe kalpe raśmiprabhāso nāma tathāgato 'rhan samyak (W:samgak) -saṃbuddho (W:sambuddho) lokebhaviṣyati vidyā-caraṇa-saṃpannaḥ sugato loka-vid anuttaraḥ puruṣa-damya-sārathiḥ śāstā devānāṃ ca manuṣyāṇāṃ ca buddho bhagavān / dvādaśa cāsyāntara-kalpān āyuṣ-pramāṇaṃ bhaviṣyati / viṃśatiṃ cāsyāntara-kalpān saddharmaḥ sthāsyati / tac cāsya buddha-kṣetraṃ śuddhaṃ bhaviṣyati śucy-apagata-pāṣāṇa-śarkara-kaṭhalyam apagata-śvabhra-prapātam apagata-syandanikā-gūthoḍigallaṃ samaṃ ramaṇīyaṃ prasādikaṃ darśanīyaṃ vaiḍūrya-mayaṃ ratna-vṛkṣa-pratimaṇḍitaṃ suvarṇa-sūtrāṣṭā-pada-nibaddhaṃ puṣpābhikīrṇam / bahūni ca tatra bodhisattva-śata-sahasrāṇy utpatsyante / aprameyaṇi ca tatra śrāvaka-koṭī-nayuta-śata-śahasrāṇi bhaviṣyanti / na ca tatra māraḥ pāpīyān avtāraṃ lapsyate na ca māra-parṣat (W:pāpīyān māra-parṣā vā) prajñāsyate / bhaviṣyati (W:bhaviṣyanti) tatra khalu punar māraś ca māra-parṣadaś ca / api tu khalu punas tatra loka-dhātau tasyaiva bhagavato raśmiprabhāsasya tathāgatasya śāsane saddharma-parigrahāyābhi-

yuktā bhaviṣyanti //

06-03. さて、世尊は、そのとき、このような偈を唱えられた。

atha khalu bhagavāṃs tasyāṃ velāyām imā gāthā abhāṣata /

06-04. わたしには、比丘たちよ、仏の眼で見える、この大徳カーシャパの仏になるのが、
未来の世において、無数の劫の後に、両足の者の最高の方々に奉仕してから、（一）
三百万億に満ちるジナたちに、会うだろう、このカーシャパは。そうして
そこで、梵行を修めるだろう、仏の智慧を求めて、比丘たちよ。（二）
両足の者の最高の方々に奉仕してから、この無上の知を具え、
最後の化身において、世間の救済者、無比の偉大な聖仙となるだろう。（三）
その国土は、高貴で、輝かしく、清浄で、見晴らしがよく、
そのさまは常に魅力的で、楽しく、また金の糸でみごとに飾られている。（四）
そこには宝玉製の種々の樹木が、八条の糸の区画の一つに一本ずつあり、
この国土に、魅力的な香りを放っているだろう、比丘たちよ。（五）
類いあまたの花々が、みごとに飾られ、種々の花々が咲き輝き、
割れ目も穴もそこにはなく、平らで、清浄で、見晴らしがよいだろう。（六）
そこには幾百万億の菩薩たちがいて、心はよく訓練され、神通力は偉大であり、

救世者の広大な経典を受持するひとたちが、幾千となく数多くいるだろう。（七）
煩悩の汚れを離れ、最後の化身を保つ、法王の声聞たちもいる。
その数は、いかにしても知りえない、天神の知識で幾劫のあいだ計算しても。（八）
その仏は、十二中劫のあいだ世にとどまり、正法は二十中劫とどまり、
正法に似た教えも、二十中劫、光明如来の荘厳として存在しよう。（九）

paśyāmy ahaṃ bhikṣava buddha-cakṣuṣā sthaviro hy ayaṃ kāśyapa buddha bhekṣyati /
anāgate 'dhvāni asaṃkhya-kalpe kṛtvāna pūjāṃ dvi-padottamānāṃ (W:padottamānāṃ) //1//
triṃśat-sahasrāḥ paripūrṇa-koṭiyo jinān ayaṃ drakṣyati kāśyapo hy ayam /
cariṣyati tatra ca brahma-caryaṃ bauddhasya jñānasya kṛtena bhikṣavaḥ //2//
kṛtvāna pūjāṃ dvi-padottamānāṃ samudāniya jñānam idaṃ anuttaram /
sa paścime cocchrayi loka-nātho bhaviṣyate apratimo maha-ṛṣiḥ //3//
kṣetraṃ ca tasya pravaraṃ bhaviṣyati vicitra śuddhaṃ śubha darśanīyam /
manojña-rūpaṃ sadā premanīyaṃ suvarṇa-sūtraiḥ samalaṃkṛtaṃ ca //4//
ratnā-mayā vṛkṣa tehiṃ vicitrā aṣṭā-padasmiṃ tahi ekam eke /
manojña-gandhaṃ ca vimuñcamānā bhekṣyanti kṣetrasmi imasmi bhikṣo //5//
puṣupa-prakāraiḥ smalaṃkṛtaṃ ca vicitra- puṣpair upaśobhitaṃ ca /

śvabhra-prapātā na ca tatra santi samaṃ śivaṃ bheṣyati darśanīyaṃ //6//

tahi bodhisattvāna sahasra-koṭyaḥ sudānta-cittāna maha-rddhikānāṃ /

vaipulya-sūtrānta-dhsrāpa tāyināṃ bahū bhaviṣyanti sahasra 'neke //7//

anāsravā antima-deha-dhāriṇo bheṣyanti ye śrāvaka dharma-rājñaḥ /

pramāṇu teṣāṃ na kadā-ci vidyate jānena gaṇitva kalpān //8//

so dvādaśa (W:dvādaśo) antaraka (W:antara) -kalpa sthāsyati saddharma viṃśāntara-kalpa sthāsyati/

pratirūpakaś cāntara-kalpa-viṃśati raśmiprabhāsasya viyūhabheṣyati //9//

「正法に似た教え」とは「像法」のこと。釈尊の滅後五百年は、釈尊の影響が強く、正しい教と行と証（さとり）が存続するので、この時期とその教えを正法といい、続く千年は教と行はあるが証がないので、この時期と教えを末法という。正法を千年、像法を五百年とするなど諸説がある。

「清浄で、明るく、石や小石や砂は除かれ・・・」大乗経典に描かれる仏国土は、ほとんどすべてこの定型句によって描写される。インド人の土地に対する理想がこういう方向にあったのだろうという学者もいる。平坦なばかりでは退屈だろうと、わたしたちは感じるので、日本人の描く浄土には山も渓も描かれる。「八条の金糸」と訳しはしたが、これが具体的にどういうものでどのようなことに使われるのか、はっきりしない。

「パーピーヤス」は釈尊の成道を妨げた悪魔の王で、魔波旬などと音訳される。

雄叫

1993 01 02　原田　慶

空に向かってレンガを積んだ
魔法使いの家のように
巨大なクッキーのように
レンガの壁は
天辺のとがった五角形
さまざまな広さの空洞をもち
かた側だけに太い木枠の
ガラス窓を入れたので
空がいっそう青く見え
白い雲も往き来した
ぶあついレンガの壁は
地上に建てた空のマスク
仰げば
思いきり小さな自分を感じられるのだ
誰の領域でもない空を

風が自由に吹き
星は金色に輝いた
漆喰に埋まったレンガの間を
するすると
虫がはいまわり
陽はかげりまた晴れて
光の矢を四方に放つ
邪魔をするものはなく
壁はひとりがっしりと立ち
空は呼吸しまばたきし
ひとときここに憩う
いつの頃かずっとむかし誰かがたぶん
果てしない空を慰めようとして
こんな壁を造った
今ではこれを人々は
いばら姫の城と呼んでいる

村の思い出

1993 01 18　原田　慶

山と森にかこまれた小さな村だった
わたしと妹は土曜日の授業が終ると大急ぎで家に帰り
二里を歩いてその村へ行くことにしていた
村の入口に着くと広い砂の川を渡り急な坂を上って行く
そしてきつい下りをいつも駆け降りるのだった
途中の竹藪のなかに赤い椿がいっぱい咲いて
暗い道一面にぽたぽたと散り敷いていた
藪の奥に天理教の教会があり一日に何度か鉦と太鼓の音がしたが
それが遠い祭りのように感じられて何故か寂しかった
坂を下って村の中に出ると田園が広がり
土手の中腹や丘の上や山かげに家がひそかに見えかくれし
中央の田のなかにわたしの祖母の家があった
高い杉の木立ちに囲まれ門からまっすぐの突き当たりに入り口があったが
家相が悪いと言われ門を南へ移したので見馴れるまでには少し時間がかかった
広い庭の物置きよりに牛をつなぐ杭が立っていて牛が頭をこすりつけるので

棒はつるつると光っていた
その杭はわたし達の遊ぶためにはかくれん坊の鬼の柱ともなり
時には木登りの道具にもなった
牛小屋の敷き藁をかえるのを待ちながら庭につながれている牛の目は
大きくてやさしくあたりの景色がたくさん写っていた
かまどには牛のために大きな鍋がかけてあり土間を隔てて
牛と人といっしょに住んだが牛の匂いはすこしもしなかった
鶏が土間に入ってきて糞を落し黒猫がいつも鶏をねらっていた
祖母はいそがしく紺色の仕事着で動きまわり
家にいることはなかった
わたしが思い出す祖母の家の長い縁側には
明るい陽がさし洗濯物がとりこまれていたりする
工業学校に行っている若い叔父のところへ子ども達が集まって
日光写真をしたり絵を描いてもらったりしている
夕暮れにはその叔父が猫をふところに入れてかまどの火をたいた
わたしと妹は傍でだまって火を見ていた

ごはんが炊きあがり大根が煮え漬け物がきざまれ牛の飼葉も煮えた
おなかをすかした牛が小屋のかんぬきをかたかたいわせてさいそくする
若い叔母が飼葉桶をもってきて
きざみ藁や米ぬかをまぜて煮たものを鍋から移し
牛のところへ運んで行くのをあとからそっとのぞきに行ってみると
うす暗いはだか電球の下でふうふういいながら牛は
桶の中に頭を入れ桶はゆっくり揺れていた
大きな藁屋根の上に瓦屋根をもう一つのせた祖母の家は
ふしぎなほど部屋が多かった
仏間は一段たかくしてあり板塀に囲まれた植込みがあり
奥座敷の広い泉水にはとんとんと音をたてて流れる湧き水があった
中の部屋には陽が入らないのでいつも暗くわたし達は入ったことがない
若い叔父は二人いて年上のほうは電車の運転士をしていたが
二人とももの静かであまり話さずやさしい人だった
あんなにおだやかで美しい人達をわたしは他に知らない
それから間もなく年下の叔父は東京へ就職し

運転士をしていた叔父は京都へ菱子に行ったから
そののち会っていない
わたしはおとなになって若い叔父と同じ笑い声をもつ人と結婚した
祖母はよく墓参りに行った
たれかの命日には暮れ方からでも出かけた
墓地は村と山の境にあり葦の茂った池の奥だった
山から浸み出すぬかるみの道をすぎて池ではよくウシガエルが鳴いた
祖母の家の墓はいくつもあって石塔や木の墓標の傾いたもの
緑の芝生におおわれたふかふかの土饅頭もいくつかあった
祖父の墓石には表に祖母の戒名も並べてきざまれ
これには朱が入れてあったが
祖母は四十四歳で寡婦となり戒名と墓が待っていた
わたしは祖父を写真でしか知らない
祖母が墓地に行くときは妹といっしょについて行った
帰り道で祖母は四角い池のある家や山かげの小屋に寄って何かを話した
昼間はたいていの家が田畑へ出て留守だから暗くなってから訪ねる

わたし達は紙に包んだ金平糖をもらったりした
ニッケイの入った長細いのや星の形をしたのがまじっていて
白・桃・黄・緑など色の美しいお菓子である
日が暮れると木の間からかすかにもれる家々の明りがホタルのように静かだった
わたしは心から祖母が好きだったので
祖母もわたしのことが好きだと信じていた
大きな藁ぶきの家が建てなおされすっかり新しくなって間もなく
雪の降る日に祖母が亡くなった七十三歳だった
祖父は三十年も隣の席をあけて祖母の来るのを待っていたことになる
妹が祖母は妹をいちばん好きだと言っていたというので
びっくりしたけれどわたしは
いつでも自分が愛されることしか知らなかったことに
ずっと後になってから気づいて
もっともなことだと思ったのだった
ほかにもう一つ村への入り口があって砂の川の古い土橋を渡り
だらだら坂を下る

そこは両わきが草ばかりで月見草がたくさん咲く丘だった
途中に大きな水車がまわっていて村の人達が順番をきめて使っていた
そこを過ぎて山をまわると村のまん中の祖母の家が見えた
わたしは自転車にまだ馴れていなくて
この坂を下るときに水車の川に落ちそうになった
巾は広くないが大きな水車をまわすだけの水がとうとうと流れていたから
自転車のまま川におちるのはとてもこわかった
観念して落ちようと思ったとき
ハンドルがしぜんとうまく動いてすうっと通り過ぎ
その時から自転車に自信ができた
わたしは心臓がとびだしそうなほどどきどきしていたにもかかわらず
誇らしい気持になって
祖母の家へ帰って行った
小さな村は家が木々に埋もれて点在し墓地と水車は反対の方向にあるのだが
どちらが村はずれになるのだかよくわからない
祖母の親類の家が何軒かあって

小高いところの家では主人が病気をしていた
それは蛇の夫婦を殺したからだと言われていた
ある家には大きな門があり裏に倉がずらりと並んでいたので
わたしは昔話を聞くとよくそこを思い出す
祖母が亡くなってすこしたってから
墓地は整理され葬儀の祭場も新しく建ち墓は石塔ばかりになり
どこの墓地とも変らない様子になった
水車はとりこわされ道はアスファルトになって
月見草の丘には住宅が建ったという
あの頃から何十年
村を訪ねたことはないけれど
わたしの思い出のなかにあるかぎり
小さな祖母はくるくる働き
叔父や叔母は若く美しく
わたしと妹は
いつまでも子どものままでいる

永明文化の指揮者（中国の詩人と仏教　二七）　1992 01 02　原田憲雄

前回は、南朝の斉の、竟陵王・蕭子良の生涯を素描しながら、四八七年まで述べました。永明五年で、子良は二十八歳でした。『南斉書』の伝には、このとし正位の司徒となったことを記したあとに、

居を鶏籠（けいろう）山邸に移し、学士を集めて五経百家を抄せしめ、『皇覧』の例により『四部要略』をつくる。名僧を招致し仏法を講語せしめ、経唄の新声を造り、道俗の盛んなる、江左に未だあらざるなり。

といっています。『皇覧』は魏の文帝が作らせた百二十巻の類書で、百科事典の最初のものといわれます。江左とは揚子江下流南岸地帯。この記事のあとに、父の武帝が雉射ちを好むのを諫める文章が載せてあり、「菩薩は殺さず」「衆生を悩ませず」などのことばが見え、かれの仏教信仰の目標が、世俗の人としての生活をしながら菩薩行を実践しようとしていたことが伺えます。つづいて、

また文惠（ぶんけい）太子と同じく釈氏を好み、甚だあい友悌す。子良の敬信もっとも篤く、しばしば邸園において斎戒を営み、おおいに朝臣・衆僧を集め、食をみつぎ水をすすむるに、あるいはみずからその事をしたしくす。世のひと、すこぶる宰相の体を失すとおもえり。人に勧めて善をなさしめ、いまだかつて厭倦せず。ここをもって遂に盛名を致す。

と記します。供養の食事や、口や手を濯ぐ水をすすめるのに、自分ですることもあるので、宰相の仕ぐさとしては軽々しすぎる、という批評が出るほどだった、というのです。インドでは、国王であろうが王子であろうが、

宗教家に対する供養は自らの手でするのが当然なのですが、それを宰相らしくないなどと批評するところが、中国の貴族や官僚に根強い自尊の通念なのでしょう。子良はそんな常識にとらわれず、「供養」の本義に従ってすなおに奉仕したのです。

太子や子良の営む仏事は、このころが最も盛んだったのですが、沈約に、太子の法要や仏教講習会の趣意書の代作が二篇あり、その一つに「建元四年(四八二)四月十五日」の日付があり、子良の講習会の趣意書の代作が三篇あり、その一つに「永明元年(四八三)二月八日」の日付がありますから、ずいぶん早くから盛んに営んでいたことがわかります。上の好むところ下これよりも甚だしといいますから、貴族や知識人の仏教に対する信仰や学習熱の盛んなことは、早くから仏教を奉じた異民族の北朝はともかく、漢民族の国家としては前代未聞といってよく、これが次の梁代には最高潮に達するのですが、梁朝を開いた蕭衍が竟陵王の八友の一人で子良の影響を深く受けた人であることは前に述べた通りです。

もっとも、そんな時代には、そんな風潮を苦々しく眺める人がいるのも自然です。

范縝(はんしん)は范雲の従兄で、やはり竟陵王の邸に出入りしていましたが、そうした一人で、つねに「仏なんぞ存在しない」と高言していました。子良が「きみは因果を信じないそうだが、じゃあどうして富貴貧賤の別があるのだろう」とたずねます。現世の境遇は過去世の善悪の業によるという考え方にたった質問なのでしょう。これに対して范縝は「人の生れは一本の樹にさく花と同じことですよ。同じ枝に同じように咲いた花でも、風に吹かれれば、簾をはらって豪華なカーペットに舞い落ちるのもあれば、垣根をつたって野壷に転落するのも

あります。カーペットに舞い落ちたのが殿下で、野壺に転落したのがぼくです。落ちたところの貴賤の違いはたしかにあるが、あなたのいわゆる因果ははたしてどこにあるのですか」

その場でのやりとりはこれですんだのですが、范縝は、後にあらためて「神滅論」を著わし、今日の政治や風俗の頽廃は人々が仏教に帰依したからで、因果応報説を打倒すれば、仏教の根拠がくずれ、「小人その壟畝に甘んじ、君子その恬素を保ち、耕して食わば食窮すべからず、蠶して衣（き）なば衣尽くべからず。……もって生を全うすべく、もって国を匡（ただ）すべく、もって君を霸とすべし」と道家哲学による治国論を展開します。

「神滅論」の作成を、あの対話の直後のこととし、子良がこれを読み仏教僧に批判文を書かせたが、范縝を屈伏させることはできなかった、というのが史書一般の伝えるところですが、梁の武帝の時代に入ってからだという考証があり、そのほうが事実に近いようにおもわれます。子良は、仏教を信じない者に勧め、反対者を批判したり、批判させたりはしていますが、反対者を権力によって弾圧するようなことはせず、かれらの言論にもっともなところがあれば、それを賞揚することさえ惜しんでいないのです。范縝にしても、竟陵王が言論を弾圧する人間であったら、ああいう答えをしていたかどうか。仏教の擁護論とともに反対論もたくさん出て、結果として宗教や学術の検討が盛んになったのは、子良の真実愛好ののびやかな精神に、この時代の自由な気風が力づけられたためだろうと、わたしは推察します。なんでもないようなことでありながら、これは中国の歴史を通じて珍しい例なのです。それから一五〇〇年たった現代の中国においてなおきびしい言論統制の実情を参考にしても、そのことが確かめられるのではないでしょうか。

さて、四九一年、都の建康から呉興郡にかけて大水害が発生したので、子良は救援活動をはじめ、邸宅の北方に被災者収容施設をつくり、食料・衣料・医薬品などを供給しました。

四九三年正月、子良の兄の長懋が死にます。三十六歳でした。その諡（おくりな）が「文恵」です。このとき東宮に行った武帝は、調度などが贅沢で、太子の身分では使用できないものが少なくないのを知って激しく怒り、太子と親しくしていながら、これを父親である天子に報告しなかったのはもってのほかと、竟陵王を「嫌責（けんせき）」しました。武帝はすぐれた皇帝で、政治に励み、自身はもとより皇族たちにも質素であるよう命じていたのですが、太子をはじめ、子良以外の皇子は、みな贅沢ずきで、皇帝の宮殿をしのぐ豪壮な園庭や邸宅を築き、父の眼をごまかすことに汲々としていたのです。子良は案じていたでしょうし、父の狩猟を諫めたほどですから、兄にも直接に忠告はしていたでしょうが、父に告げるのはかげぐちになるようでためらい、その結果、代表して非難を受ける役にまわされたのでしょう。

四月、文恵太子の長子の蕭昭業が、皇太孫に立てられます。昭業は、美少年で、隷書が巧みでした。また目上の機嫌をとるのがうまいので、小さなときから祖父の武帝に可愛がられました。一時は、叔父の子良の邸で起居し、子良の妃に愛育されました。しかし表面と内心とは違っていて、父の文恵太子が亡くなり、別れの儀式には泣いて泣いて堪えられないようだったので、見ている人たちまで貰い泣きするのでしたが、自分の部屋に帰ると、けろっとして遊び戯れるのです。贅沢好きの太子さえ驚くほどの乱費に、小遣いを制限され、腹を立てて「仏教では、前世で徳を積めば帝王の家に生まれるというが、王子に生まれてみれば、ああしろ、こうしちゃいかんと

うるさいばかり、商売人の家に生まれたほうがよっぽどましだよ」とぼやいた、ということです。こういう話は、上のほうには知れなくてもあんがい世間には漏れるもので、眉をひそめる人が少なくありません。

七月、皇帝は発病します。延昌殿に移って療養し、子良に命じて宮殿を武装兵で警護させます。子良は父皇帝に医薬を進め、また名僧を殿前に集めて経典を読誦させ、父が仏の花といわれるウドゥンバラ華を夢に見ると、青銅でその花を作って、病床の四隅に挿させ、日夜、殿内で看護に励みます。昭業は一日おきに見舞いにくるだけで、遊び歩いています。

皇帝が危篤に陥って、昭業がどこにいるのかわからないという状態がしばらくあり、内外は驚きおそれました。皇帝のあとには竟陵王を立てるほうが、といった声がひそひそとささやかれます。現に警備軍に加わっていた八友の一人の王融は、それが皇帝のご遺言だといって、草稿さえ用意するしまつです。しかし同じように警備軍に加わっていた八友のあいだでも意見はまちまちで、范雲は賛成でしたが、蕭衍はそれは謀反じゃないかと疑っていました。

やっと駆けつけた皇太孫の昭業を、中書省の門をまもっていた王融が引き留め、通そうとしません。延昌殿では、いったん息の絶えていた皇帝がふと目を覚まし、太孫はどうしたんだ、と尋ねます。そうして、自分の死後は、子良が昭業を補佐し宰相の職務は武帝の従弟の蕭鸞（しょうらん）にさせるように、と言って、ことときれます。ちょうどそこへ鸞が昭業を奉じて駆けつけ、これで昭業が次の皇帝となることが決定しました。

このとき、竟陵王・蕭子良そのひとに、帝位に上る意思がなかったのかどうか、という点では、史書のいろい

ろな記述をつきあわせると、ははなはだ微妙ですが、『南史』は、武帝が「子良が補佐し」といったのに、（文書となった）遺詔に「事は大小となく鸞と相談せよ」とあるのは、子良が、権力を握って政治をするといった世俗的なことは好まないたちなので、補佐のことまで蕭鸞に譲ったのだ、といっていて、これが実情のように察せられます。

ところが、竟陵王は前から人気が高かったので、文恵太子の亡くなったころから、昭業は、自分は天子になれないのではないかと案じ、かつては養い親でもあった子良を嫉妬するようになります。ことに武帝の臨終に駆けつけたとき、道を遮った王融が、竟陵王の腹心とされる人物であるため、これも子良の命令によるものと信じこんだのでしょう。かれは天子になるとすぐ王融を捕えさせ、子良を中書省に軟禁します。王融を殺したのち、子良を大傅（たいふ）という三公の地位にまつりあげ、政治の実務からはずします。そのあとは、自分の気に入ったものに対する恩賞の乱発と、放蕩遊興のために、武帝から引き継いだ皇室の財産数億を一年たらずの短期間につかい果たします。翌四九四年、四月、竟陵王・蕭子良は三十五歳で亡くなります。諡は「文宣（ぶんせん）」。

その年の七月、蕭鸞は、皇帝の昭業を殺します。二十二歳でした。鸞は、昭業の弟の昭文を立てて皇帝にし、十月、皇帝昭文をやめさせ、自ら皇帝となります。明帝です。明帝は、その後の数年間に、高帝と武帝の子孫をほとんどすべて殺し、四九八年、自分もまた死にます。四十七歳でした。その二男の蕭宝巻（しょうほうけん）が即位しますが、五〇一年、蕭衍にかつがれた蕭宝融（しょうほうゆう）が皇帝となります。和帝です。宝融は、明帝の八男です。五〇二年四月、和帝は衍に帝位を譲り、衍が即位して梁の国を建て天監と改元します。その翌

日、蕭宝融は殺され、斉は、建国からわずか二十四年で滅亡します。蕭衍が梁の武帝です。

さて、竟陵王に返りましょう。

『南斉書』は、王の著作について次のようにいいます。

著わすところ内外文筆数十巻。文采（ぶんさい）なしといえども、多くはこれ勧戒。

「内」とは内典（ないてん）すなわち仏教関係のもの、「外」は外典（げてん）すなわち仏教関係以外のもの、「文」は韻文、「筆」は散文を指すのでしょう。「文采なし」とは、表現が装飾的でないことですが、そのため文学的な価値において高くない、といっているのでしょう。「多くはこれ勧戒」とは、内容や主題が、宗教的、あるいは道徳的なものが多い、というのです。

竟陵王の作品は、『藝文類聚（げいもんるいじゅう）』などに詩が五首、『全斉文（ぜんせいぶん）』などに文が二十七篇保存されているだけですが、王融の「竟陵王の郡県名に奉和す」という題などによって、他にも詩の作品がかなりあり、任昉の「竟陵文宣王行状」の記事によって、「山居四時序」はじめ種々の散文のあったことがわかり、「外」なる作品が多く失われたことが察せられます。

『出三蔵記集（しゅつさんぞうきしゅう）』十五巻は、現存する仏教書目録としては最古のもので、しかも記事の正確なことで有名です。著者は律師の僧祐（そうゆう・四四五―五一八）です。第十二巻に「斉太宰竟陵文宣王法集録序」があり「わたしはかつて仏道のゆかりによって（竟陵王に）お会いすることができ、受戒に関与し、法義の講師に招かれたこともあった。哲人は亡くなられても、その道心は亡びない。静かに遺篇をたどると、温顔を

そこに見るようである」と述べ、その著作の目録を掲げています。『淨住子』十巻『華厳瓔珞』二巻『諸仏名』十巻『諸菩薩名』二巻『菩薩決定要行』十巻『注優婆塞戒』三巻などあわせて十六帙一百一十六巻。この他に「自書経目録」として、大字維摩経一部十四巻、細字維摩経一部六巻、妙法蓮花経一部十四巻、般舟三昧経一部二巻、無量寿経一部四巻、十地経一部十巻、華厳経六巻、大泥洹経五巻、虚空蔵経二巻、泥洹受持品一巻、護身経一巻、観世音経一巻、普賢経一巻、金剛波若経一巻、八吉祥神呪経一巻、出生無量門持経一巻、呵色慾経一巻、を記録します。すべて仏教関係の著作と書写のみで、しかも人の手を借りて抄写させた経論類は含まれていませんから、これらは竟陵王がみずからの手で著わし、あるいは写したものです。

『南斉書』のいう「数十巻」は、その中に「内」なる詩文も含めてのことでしょう。とすればその「数十巻」と『出三蔵記集』の「六帙一百一十六巻」とはへだたりが大きすぎます。

『出三蔵記集』が正確だといわれるのは、そこに記録されたものはおおむね僧祐が実物と照合しているからだといわれています。ことに竟陵王の著作については「序」の文から察して、律師が眼を通していることは疑えません。それでは『南斉書』のほうはどうでしょうか。

『南斉書』の著者蕭子顕（しょうしけん・四八九～五三七）は斉の高帝の孫で竟陵王の従弟ですが、斉の滅後、梁の武帝に仕え、国子監（国立大学総長）となり侍中・吏部尚書にのぼり、皇帝から愛重されました。『梁書』に、

子顕は、容貌が偉大で、身長八尺、学問を好み、文章が巧みだった。かつて「鴻序賦」を著わしたところ、尚書令の沈約が見て「明道の高致を得たものといえよう」とたたえた。

とその人物を描き、梁の武帝はかれを「神韻峻挙」とほめながら、「才を恃み物に傲ったから、《驕》と諡したらよかろう」といったと伝えます。

蕭鸞（明帝）が斉の帝位を簒奪し皇族を殺戮したとき、子顒の兄の蕭子恪（しょうしかく）が明帝に帰属したため、子恪の兄弟はみな殺戮をまぬかれました。明帝に帰属したことから察すれば子顒兄弟は斉の皇族ではあっても、斉の武帝の子や孫のような中心からはやや離れ、かれらに対して阻隔感をもったかもしれぬと推測できます。蕭鸞が、高帝の甥で早く孤児となったため高帝に養われ、実子より愛されながら、後に高帝の子や孫をほとんど殺戮したことに伺えるように、権力者の親戚間でのこういう阻隔感は、想像を絶するものがあります。

自身が学問を好み、文章が巧みであれば、他の学問や文章に対する評価が厳しくなりがちです。子顒は『南斉書』のほかに、『後漢書』百巻『晋史草』三十巻などを著わしました。歴史家としては大家というべきでしょうが、梁朝に仕える史臣としては、梁の帝王の「鴻業」をたたえる使命をもつわけですから、蕭衍の簒奪も簒奪と書かないのはもとより、前朝の斉の美事を控え目に記していることは、注意すればよくわかります。竟陵王の伝の記事はおおむね好意的といえそうですが、著作の「多くはこれ勧戒」であることは、客観的な事実にしても、「文采なし」という評語には、「才を恃み物に傲る」子顒の性格が、無意識に働いているのではないでしょうか。「数十巻」というのも、綿密に調べた上での省筆ではなかったように察せられます。

僧祐の記録した「内」の百十六巻に「外」が十数巻として、竟陵王の著作は百三十巻ほどだったと、見てよさそうです。ところで、『隋書』経籍志には「斉竟陵王子良集四十巻」と記録し、『旧唐書』には「三十巻」とし

ます。『隋書』は、竟陵王の死後約百二十年の唐の初期に、『旧唐書』は、それからさらに約三百年後の五代に著わされました。「四十巻」と「三十巻」の内容はわかりませんが、竟陵王の著作は、七世紀の初めごろまでに多く失われ、一〇世紀までにまたなくなり、以後さらに失われ、今日にいたったのです。

現存のわずかのものによって全体を推し測ることはできません。しかし内典について百二十巻にちかい著作をもつ人なのですから、それだけでもいまの世界の大学の仏教学の教授の平均を超え、仏教関係外のものが、かりに「文采なし」としても、斉梁の文学のようには綺靡（きび）でないというだけであって、遺存するものから判断して、けっして素人の文章と見くだしうるものではありません。

しかし、竟陵王を考えるばあい、大切なことは、かれをひとりの「著作者」と見るのではなく、さきに述べたように、多くの宗教家や学者や文人を集め、かれらに共通の問題と方向をさぐり、与え、かれらがそれらを考え、前進し、解決するために必要な場所や費用を用意し、援助して、永明という新しい時代の文化を企画・監督・製作した「指揮者」としての面を見るべきです。もし竟陵王が個人として「文采」が豊かだったとしても、「才を恃み物に傲る」人だったら、かれほどの大きな視野を開きえず、多くの力を結集しえなかったはずで、かれのしいた軌道に乗りえなかったら、次の時代の梁の文化が、短い期間にあれほど大きく花開いたかどうかは疑問だったでしょう。かれ自身も、かれの生きた斉の時代も、短命だったので、つづく梁の文化の絢爛のかげにかくれ、かれの業績はつい見忘れられがちでしたが、今世紀に入って小笠原宣秀氏らによって注目されるようになったのは、「他の人の善を、おのれのことのように」喜びえた人、とたたえられた竟陵王のために、うれしいことです。